

世界の望む未来

師勝中学校三年 斎藤 杏

もし、今この瞬間、原子爆弾が落ちたら――

八月九日午前十一時二分、私は犠牲者に哀悼の誠を込めて黙とうを捧げました。

私は今回、初めて長崎を訪れました。そこはかつて原子爆弾が落ちたとは考えられないほど美しい街並でした。きっと七十一年前のあの日も変わらない日々を過ごしていたでしょう。

長崎原爆資料館には十一時二分で時が止まった柱時計、熱によってガラスとくっついてしまった手、爆風により大きく変形した鉄筋、さらに、全身熱傷の少女や顔の原形をとどめていない男性、背中に熱線で大きな深い傷を負った男性の写真など、想像以上の無惨で残酷な現実がありました。「何でこんな目に合わなきゃいけないかったの」「何か悪いことした」と訴えられているようで、目をそらすようにもそらせず、しばらくその場を離れられませんでした。

「本当の平和をもたらすのは、ややこしい会議や思想ではなく、この単純な愛の力による。」「いとし子よ」より

様々な場所を訪れた中、印象に残っている長崎市永井隆記念館で出会った言葉です。永井隆博士は被爆し、頭に大けがを負いながらも救護活動を行い、原子爆弾のおそろしさや戦争のおろかさ、「いのち」と「平和」の大切さを訴えた人です。先日、私は国語の授業で人権についての作文を書きました。私は平和をテーマにしました。その時に、平和を言葉で表すのがとても難しく、自分の思う平和を上手く書き表せませんでした。ですが、永井博士の平和は誰にも伝わる言葉で表されていました。原子爆弾落下という辛い体験をした博士だからこそ言える言葉で、この言葉に出会えた時の感動を忘れません。

現在、世界中には核兵器が一万六千発以上あるといわれています。なぜ、核兵器はなくならないのでしょうか。一体どうしたら核兵器はなくなるのでしょうか。「長崎を最後の被爆地に」日本は唯一の被爆国としてこれまで訴え続けてきました。核兵器をもっていることで、自分の国の安全を保とうという考えがあることも分かります。ですが、平和を求める気持ちがあるのなら、核兵器はなくすべきです。被爆者の平均年齢が八十歳を超えた今、私達若い世代が訴えていかなければいけない、そう感じています。

一日でも早く、核兵器のない平和な世界を目指して。

過去を知る大切さ

西春中学校三年 鶴寫 英輝

八月九日。我々人類が、決して忘れてはいけない日の一つです。人がつくった兵器で、多くの人が死んでいった日です。そんな日を知るために、僕は、平和の使者として長崎へ行きました。

僕は、長崎へ行くのが初めてだったので、原爆の被災地というイメージしか頭にありませんでした。しかしそれは違いました。確かに、当時の面影が残る所もありましたが、今ではとても活気のある場所でした。けれども、原爆で破壊された建物のがれきをわざと残していたり、被災当時の地層が保護されていたりと八月九日を忘れないようにされていました。僕は、そのがれきを見たときに、これらは、絶対に残していかなければならないと思いました。そして、僕たちは、次の世代の人たちに八月九日という日を伝えていかなければいけないとも思いました。なぜなら、戦争とはとても悲惨だからです。それを僕は当時の写真を見て感じました。道路にころがっている真つ黒な死体の写真。縁側で死んでいる少年の写真。皮膚が垂れてしまっている少女の写真。あまりの恐怖に、僕は直視できませんでした。また、今でも後遺症で苦しんでいる人やその周りの家族も、苦しんでいるということも伝えていかなければいけないと思いました。

僕は、この平和の使者派遣に参加して、ある人物がとても印象に残りました。それは永井隆博士です。博士は、放射線医師で、昭和十九年に医学博士になった人物です。そして博士も原爆を体験した方でした。なぜ印象に残ったかというと博士が残した言葉の一つ一つがとても重みのある言葉だったからです。

「己の如く隣人を愛せよ」

「原子爆弾は長崎でしまい！長崎がピリオド！平和は長崎から」

僕は、これらの言葉を聞いて博士の戦争への怒りと平和への願いが込められていると思いました。そして僕たちは、このような人たちの思いを次の世代の人たちに伝えていかなければならないのです。

今年は戦後七十一年度。しかし、長崎に住む人々の思いは変わりません。

「ナガサキ マスト ビーザ ラスト」

被爆者代表の井原東洋一さんがおっしゃった言葉です。長崎を最後の被爆地にしなければならぬ。そう思いながら長崎に住む人たちは生きていると思います。そして今、僕たちにできることは、過去を知り、次の世代の人たちに伝えることです。

平和を願う

白木中学校三年 祝 友里愛

長崎には、たくさんの折り鶴がありました。つるしてあるだけでなく、地面にもあふれていました。北海道、福島、沖縄など、全国各地から集まった、平和への願いがひしひしと伝わってきます。

私は、昭和二十年八月九日午前十一時二分から始まった、長崎の恐ろしい現実を知りました。原爆の悲惨さは、私が持つどんな言葉を使っても、全てを伝えきれません。命を、町を、日常を、一瞬にして何もかも奪ってしまいました。どれだけ辛かったでしょうか。苦しかったでしょうか。考える度、胸がしめつけられます。

これまでの私は、平和というのがどれだけ大切で、有難いことか、気付きもしませんでした。今回の、長崎平和祈念式典に参列して、平和について考える大きなきっかけとなりました。

辞典には、戦争がなく、世の中が穏やかであることが平和だと記されています。私はこの、世の中が穏やかであるという言葉に、深い意味を感じました。

日本は、長崎の原爆投下以来、一度も戦争をしていません。そして、原子爆弾を作らず、持たず、持ちこませずの、非核三原則があります。これは、他の国から見ると、とても珍しいことだそうです。しかし、本当に日本は平和である、と断言できるのでしょいか。

私は、まだできていないと思います。七十一年前と比べたら、今私達が生きている時代はよっぽど平和です。しかし、世の中には、犯罪や自殺などがあふれかえっています。先月には、津久井やまゆり園で、一方的な考えによって卑劣な事件が起きました。障害をもっても懸命に生きている人達がいるのに、あまりにも身勝手だと思います。

私はこのような、誰かを苦しめるような事がある限り、本当に平和だとは言いきれないと考えています。皆が心の底から笑いあえるのが、私の理想です。世界中の人もそう思っていると信じています。

しかし、平和になる手段を間違え、自国を守るため、国力を示すため、と核兵器が増えていったのです。日本も核兵器の抑止力に守られています。

原爆を無くそう、平和になろうと宣言することは必要です。しかし、解決策や打開策がない限り、理想が現実になる事はありません。世界中の人が知恵をふりしぼり、有意義な話し合いをする必要があると思います。

平和は皆で作るものです。世界中の人が手を取り合えば、恒久平和は決して難しくありません。世界に平和が訪れることを、願っています。

私達に課せられた使命

訓原中学校三年 川口 夏葵

一九四五年八月九日、午前十一時二分。たった一発の原子力爆弾によって美しかった長崎の街は一瞬で廃墟と化しました。その日は、例年と同様に、暑く、よく晴れた日であったそうです。現在の長崎は、本当に原爆が落とされたのかと疑いたくなるほど、美しい街でした。その美しい街に、たった一発の原子力爆弾が落とされたことで、当時長崎に住んでいた約二十四万人のうち十四万八千七百九十三人もの人々が死亡者と負傷者となり深い傷を負いました。

被爆者の中の一人、山本幸子さんの手記には、「のどが渴いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくて、とうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」とありました。被爆した人々は、水を求め、次々と川の中へ入っていったそうです。その被爆者たちを救って回っていたのが永井隆博士です。永井博士は、自分も被爆しているのにも関わらず、他の被爆者のためにと自ら犠牲にしながら治療をしていました。私は、永井隆記念館を訪れて、永井博士が残した数々の言葉に心惹かれました。永井隆記念館の横には、病に倒れた永井博士のためにつくられた二畳一間の小さな木造の家がありました。

『なんじの近き者を己の如く愛すべし』人はともすれば、わが欲に心を奪われ、この最も大きな掟を忘れがちなものである。」

「いとし子よ」より

この掟を忘れることがないようにと、この小さな家に「如己堂」という名をつけたそうです。永井博士は、人生を終えるそのときまで如己堂から世界中の人々に戦争の愚かさや平和の尊さを発信し続けていました。

私は長崎を訪れてから、被爆地であったことを一切感じられない美しい景観をいくつも見ました。しかし、そこには私が想像していたことよりも遥かに残酷で悲しい事実がありました。今までどのくらいその事実を軽く受けとめていたのが、身にしみてわかりました。平和の使者として今回長崎を訪れたことで改めて戦争や平和などを考える良い機会になったと思います。

そもそも平和とは何でしょう。その答えは必ずしも一つとは限りません。人によって小さなことから大きなことまでさまざまな平和があると思います。私が思う平和は、「戦争がなく、全ての人々が心から笑い合える」ことです。平和な社会を形成していくためには、戦争を知らない世代の私達が、過去にあった悲しい出来事を知り、次の世代の人々にも戦争の愚かさや、平和の尊さを伝えていくこと。それがいつまでも平和な世界をつくっていくのに繋がる第一歩になると実感しました。「長崎を最後の被爆地に」それを訴え続けていくことが私達に課せられた使命だと思いました。

原爆の一番の被害とは

熊野中学校三年 鈴木 菜穂

みなさんは、原爆の一番の被害はなんだと思いますか。家を失ったこと、財産を焼かれたこと、多くの家族や友人を失ったこと、体が不自由になったこと、病気になること。もちろん、それらも大きな被害です。しかし、別の考えもあります。それは、人間に対する信頼を失ったということです。

私は長崎へ行き、心動かされる出来事がありました。それは永井隆さんとの出会いです。その方は、原爆が投下された当時の、長崎の医学博士であり、随筆家です。長崎に原爆が投下された後、自らも被爆したのにも関わらず、救護活動に当たりました。そして、原爆の恐ろしさや戦争の愚かさを訴えました。

原爆の一番の被害について永井さんが語った言葉で、印象に残っているものがあります。それは、「私自身の魂の醜さをまざまざと見せつけられ、また隣の人たちの魂の醜さをもはつきりと見たことによる、人間に対する信頼を失ったこと」という言葉です。生死の境目をさまよう人々が、まわりの人を踏み台にしてまで生き延びようとしました。その人々は後に罪悪感に苦しみ、人間の醜さを知り、まわりの人に対する信頼を失ってしまいました。それこそが、原爆の最も大きな被害だったのかもしれません。

今なお世界中には、核兵器を保有している国が数多く存在しています。その中のほとんどの国が、武器を持っていれば攻められないという考えで核兵器を保有しています。しかし、武器を持っているほうが果たして生き残ることができるのでしょうか。

永井さんは、このような言葉をも残しています。「オオカミは鋭い牙を持っている。それだから人間に滅ぼされてしまった。ところが鳩は何一つ武器を持っていない。そして今に至るまで人間に愛されて、たくさん残って空を飛んでいる。」私達の目指す平和はこういうことなのだと確信しました。核兵器をはじめとする武器を持つことをやめれば、警戒され、攻撃されることはないということです。それを、核兵器を保有している国の人達に早く気付いてもらいたいと思いました。

永井さんについて初めて知り、原爆による苦しみは、亡くなった人だけでなく、生き残った人にもあるということに気が付きました。今私達がしなければいけないのは、戦争の恐ろしさを知ることです。戦争を経験した世代が少なくなり、戦争の悲惨さを知らない人ばかりになってしまえば、再び戦争が起こってしまうかもしれません。この機会に私達の世代が戦争についての知識を増やし、同じ過ちを絶対に繰り返してはならないということを再認識するべきだと強く感じました。唯一の被爆国である日本から、世界中に平和を発信していきましょう。

世界平和をつくるために

天神中学校三年 真野 有衣子

ガタガタと揺れる路面電車。そこから見える山や川。それらの全ては、七十年前に原爆が落とされたとは思えないほど穏やかなものでした。

一九四五年の八月九日午前十一時二分、長崎の街は一瞬にして壊されました。千度を有に超える熱風では内臓の水分までもが蒸発し、飛び散るガラスは容赦なく体に突き刺さりました。辺りは水を求める人と死体で溢れかえりました。

今では多くの人が考えられないことでしょう。しかし、それは恐ろしい現実なのです。

私が参加させていただいた長崎平和祈念式典には、亡くなった被爆者の方々の冥福を、生存している被爆者の方々の健康を、そして世界の平和を祈るために、多くの方々が参加しました。中には、実際に原爆が投下された瞬間を見た方や、被爆者の遺族の方にも多く参加されました。それらの人々はいろいろな思いを抱いていたと思います。私も、決して忘れてはいけない原爆投下という事実を、これからの世界に伝えていかなければいけない若者の一人として、前日の長崎原爆資料館で学んだことを思い浮かべながら参加しました。

焼けただれた肌、原形をとどめていない溶けたガラス瓶、付いた血が酸化して真っ黒になったボロボロの衣服。そんな、目を背けたくなるような資料の数々が沢山並んでいました。「かわいそう。」や「気の毒。」などの言葉で、簡単に表わすことのできるものではありませんでした。

何故、何もかもを壊してしまうような核兵器を人間は作ってしまったのでしょうか。国力の見せつけでしょうか。では、何故、人や物を壊すことができるということが強いということになるのでしょうか。

私は、核兵器を持つていることが強いとは思いません。テロや紛争が相次ぐ世の中にいながらも、核兵器を持たず、平和を主張することの方が、よっぽど強いと思います。

もちろん、私は、このような平和に対する考えを初めから持っていた訳ではありません。北名古屋市の平和事業に参加して、改めて持った考えです。以前の私のように、平和について漠然としか考えられない人は、あの平和とはかけ離れた痛々しい戦争を知ることから始めることが良いのではないかと思います。全人類が平和に対して、しっかり考えることができれば、きっと世界は平和になるでしょう。

理不尽な争いの被害に怯える人や、何が勝利と言えるか分からないような争いを始める人がいなくなることを祈ります。また、身近で起こっていない争いは自分には関係ないと思う人が、少しでも減ることを祈ります。

これからの世界が平和になるよう心より願っています。